

中国人日本語学習者の日本語発音学習ストラテジーに関する研究

末延^{すえのぶ} 麻子^{まこ} 九州大学大学院

本研究では、学習ストラテジーの中でも、発音学習ストラテジーに焦点を当てる。特に中国人日本語学習者を対象として、発音学習ストラテジーと発音習得度の関係を調査し、発音能力向上に効果的な発音学習ストラテジーを導き出す手がかりとする。調査は音声タスクと発音学習に関するアンケートにより行なった。

1. はじめに

日本語学習者の発音学習ストラテジーについて検討した先行研究には、小川原（1997, 1998）戸田（2006）、スィリポンパイブーン（2008）、呉麗楠・磯村一弘・波多野博顕・金村久美・松田真希子（2016）などがある。呉ら（2016）の研究以外を除いた3つの先行研究では、発音能力と発音学習ストラテジーの間に関係があるという結果になった。しかし、呉ら（2016）の研究ではアクセントと拍の長さの習得とストラテジー使用の間に顕著な相関関係がないという結果になった。呉ら（2016）の調査対象者は中国国内で勉強する JFL 環境の学習者で、調査対象者が十分な音声教育を受けられる環境下であり、個人が使用するストラテジーより教育機関で受けている音声教育の方が、発音習得に影響した可能性を挙げた。

そこで、本研究では呉ら（2016）と同じく中国人日本語学習者を対象とするが、JSL 環境下で日本語を学習する学習者を対象とし、発音能力と発音学習ストラテジーの関係について考察する。

2. 調査方法

音声タスクと発音学習ストラテジーに関するアンケートにより調査を行った。中国人日本語学習者 20 名に対して発音学習に関するアンケート調査を行った。20 名全員 N1 に合格しており、うち 10 名は日本国内の日本語学校に在籍する超級クラスの学生で、大学院進学を目指している。それ以外の 10 名は、現在日本の大学もしくは大学院に在籍している留学生である。その中から日本語学校に在籍する学習者を 2 名、大学院に在籍する学習者を 2 名選出し、合計 4 名に音声タスクを録音してもらった。

3. 音声タスク及び評価方法

音声タスクは、文・文章・会話文の 3 種類である。文の音声タスクは、国立国語研究所の 2002 年から 2005 年にかけて行われた e-Japan 戦略対応事業の一環として作成された、発声発語訓練例文集のうち、「中国人日本語学習者のための例文 100」より 11 文を抜粋した。文章タスク及び会話文タスクはそれぞれ一つずつで、2010 年度の日本留学試験の日本語聴解試験の問題より抜粋した。文章タスクは全 6 文からなるカーネーションの品種改良についての説明文である。会話文タスクは、レポートに関する男子学生と女子学生のやりとりである。

評価は日本語母語話者 3 名が行なった。評価項目は、張（2015）を参考に作成し、評価は「①

適切でない ②どちらかというと適切でない ③どちらかというと適切 ④適切」の4段階評価で行った。評価項目は、「単語とアクセント」について、「イントネーション」について、「リズム」について、「総合評価」で、全10項目である。

4. 結果と考察

学習者のうち、平均点が高かった学習者Aの平均点は、単文3.8点・会話3.7点・文章3.6点で、どの項目でも最も平均点が高かった。2番目に評価が高かった学習者Bは、単文3.6点・会話3.4点・文章3.4点、3番目に評価が高かった学習者Cは、単文3.4点・会話3.4点・文章3.4点、4番目の学習者Dの平均点は、単文3.2点・会話文3.1点・文章2.9点であった。

学習者Aは単文と会話における評価点が非常に高かった。アンケートの結果と合わせて分析してみると、学習者Aのみ使っていた学習ストラテジーは、「発音の教材や参考書を読んだり、利用する」「自分の発音を録音して、それを聞いて練習する」「大きな声ではっきりと発音するように意識する」「アクセントが分からなかったら、辞書などで正しいアクセントを調べて確認する」の4つであった。「大きな声ではっきりと発音するように意識する」以外の3つのストラテジーは、学習者Aの発音に対する強い関心が現れており、他の3名の学習者よりも発音に焦点を当てて学習を行っていることが分かる。また、4名の学習者のうち最も平均点が低かった学習者Dは、使用する学習ストラテジーが最も多く、次に学習者A、学習者C、学習者Bの順であった。このことから、使用するストラテジーの数と発音能力には関連がない可能性が示唆される。

5. おわりに

今回の調査では、最も評価点が高かった学習者は、特に発音を重視した学習方法を取り入れていることが分かった。また、学習者が使用する発音学習ストラテジーの数と発音能力には関係がない可能性が示唆された。しかし、音声データは4名分と少々少ないため、今後の研究で音声データをさらに多く収集し、分析し直す必要があると考えられる。

参考文献

小河原義朗(1997)「外国人日本語学習者の発音学習における自己評価」『教育心理学研究』45,4,72-82.

小河原義朗(1998)「日本語学習における発音学習ストラテジーの有効性の検討」『言語科学論集』2,1-12.

呉麗楠・磯村一弘・波多野博頭・金村久美・松田真希子(2016)「JFL環境下での発音学習ストラテジー使用と発音習得-中国の大学で学ぶ日本語学習者を対象に-」『音声研究』20,1,6-15.

スィリポンパイブーン・ユパカー(2008)「日本語アクセントの学習における自己モニターの有効性-タイ語母語話者に対するアンケートの分析から-」『音声研究』12,2,17-29.

張若星(2015)「中国人日本語学習者の日本語発音の評価：韻律的特徴を中心に」『音声言語の研究』9,47-56.

戸田貴子(2006b)「「発音の達人」とはどのような学習者か」『第二言語における発音習得プロセスの実証的研究』科学研究費補助金研究成果報告書(課題番号16520357)19-68.